

## 実朝と後鳥羽院

——定家所伝本『金槐和歌集』をめぐる試論——

今 関 敏 子

キーワード・覇者 廷臣 影響関係

### 要旨

実朝自撰とみられる定家所伝本『金槐和歌集』は、冒頭3首が末尾3首に照応し、廷臣として後鳥羽院への狂おしいまでの帰属意識がみてとれる。

実朝は多くの先行歌に学び、摂取した。古歌ばかりではなく同時代の影響も強い。本稿は後鳥羽院詠がいかに関映しているかを検討した。表現のみを借りている場合もあれば、歌意も重なる場合がある。また唱和しているかのように歌意を微妙にずらしている。実朝は「心」も「詞」も後鳥羽院から多様に摂取したのである。また、定家所伝本成立後の後鳥羽院詠、実朝没後、承久の乱を企てた院が隠岐流謫の身で詠んだとされる『詠五百首和歌』に実朝詠に通じるものがみえる点にも言及する。

### 1、はじめに

後鳥羽院より「実朝」の名を賜り、数え年十二歳の三代将軍は歩み始めた。不穏な政治背景から生涯逃れることのでなかつた東国の覇者は、こよなく和歌を愛したのである。二十二歳にして自撰と考えられる家集・定家所伝本『金槐和歌集』が成立。没後、「鎌倉右大臣」として勅撰歌人に名を連ねることになる。

実朝は、終生、鎌倉とその周辺という関東の地を離れることはなかつた。定家所伝本『金槐和歌集』雑部には、地域性が詠み込まれ、実朝の面目躍如たる個性的な和歌が見出せる。今日、実朝の名歌として知られるものの多くは雑部の歌である。しかし、定家所伝本における実朝の歌人としての姿勢は基本的に、「周縁にある者」ではなく「都人」であり、「將軍」ではなく「廷臣」であり、集全体を見渡せば、地方性は希薄

である<sup>①</sup>。

実朝は、古歌は言うまでもなく、同時代の先行歌にも多くを学んだ。夙に斎藤茂吉は、後鳥羽院詠の実朝への影響を指摘しており、原田正彦は実朝と新古今成立期との関連を精査し、後鳥羽院歌壇の影響の深さを論じている。さらに安保如子は、実朝の『露色随詠集』享受の可能性を指摘している。<sup>④</sup>

当時、京と鎌倉の交通はきわめて盛んであった。中央の情報はそれほどの日数を経ずに鎌倉に伝わっていることが『吾妻鏡』からも知られる。政治上の必要性に付随して人も文化も豊かに往来した。西行も鴨長明も実朝に面会しているのは周知のことであろう。実朝に教えを乞われた藤原定家は『近代秀歌』を贈り、歌の道を説いた。具体的な詳細は掴み難いのだが、京の歌壇の情報は、かなり広範囲に豊富に実朝に伝わっているとみてよい。

建保三年に催された『院四十五番歌合』が実朝に贈られていることについては、後鳥羽院の実朝懐柔策とみる見解<sup>⑤</sup>が出されている。両者は政治的に、互いにその存在を意識せざるを得ない位置にあった。

本稿では、和歌の創造の上で後鳥羽院詠がいかに影響しているかについて、定家所伝本『金槐和歌集』をめぐって考えたい。

## 2、冒頭部にみる後鳥羽院敬慕—終結部との照応

《定家所伝本『金槐和歌集』の特徴—言葉の連鎖と配列構成》

源実朝の家集『金槐和歌集』の伝本は大きく分けて二つ、定家所伝本の他には、後代に編纂された貞享本（柳営重槐本）があり、歌数、配列、編纂意図は全く異なる。<sup>⑥</sup>

定家所伝本『金槐和歌集』（以下、定家所伝本と略す<sup>⑦</sup>）は次のように始まる。

正月一日よめる

1 今朝見れば山も霞みてひさかたの天の原より春は来にけり（1）

立春の心をよめる

2 九重の雲居に春ぞ立ちぬらし大内山に霞たなびく（2）  
故郷立春

3 朝霞立てるを見ればみづのえの吉野の宮に春は来にけり（7）

（定家所伝本の配列構成の独自性を明らかにするために、括弧内に貞享本の国歌大観番号を記し、同語・同語句に■を、類似表現・対照表現に傍線を付して比較する。以下、本論では比較の際に同じ方法を用いる。）

■部、傍線部を照らし合わせれば明らかのように、冒頭3首は言語が連鎖し、互いに響き合っているのである。この

ような言葉の連鎖は、作品中に散見され、定家所伝本を特徴づけている。貞享本・春冒頭の配列に比較してもそれは明らかである。(定家所伝本冒頭3首と同歌に□を付し、括弧内には定家所伝本・国歌大観番号を付す。)

正月一日よめる

1 今朝見れば山も霞みてひさかたの天の原より春は来

にけり (1)

春のはじめの歌

2 九重の雲居に春ぞ立ちぬらし大内山に霞たなびく

(2)

3 山里に家居はすべし鶯の鳴く初声を聞かまほしさに (7)

4 うちなびき春さり来れば楸生ふる片山影に鶯ぞ鳴く (6)

春のはじめに雪の降るを見て

5 かきくらし猶降る雪の寒ければ春とも知らぬ谷の鶯 (4)

6 春立たば若菜摘まむと占め置きし野辺とも見えず雪の

降れば (5)

7 朝霞立てるを見ればみづのえの吉野の宮に春は来に

けり (3)

貞享本では2番歌と3番歌の間に4首を挟む。定家所伝本にみえる言葉の連鎖、ひとつのまとまりは、この配列では崩れてしまうのである。

さらに定家所伝本に顕著なのは、周到的な配列構成であり、

部立によってそれぞれの整合性を認め得るのだが、四季の部の配列は、時間序列にきわめて正確であるのが特徴的である。霞に春の到来をみた冒頭3首であるが、霞の行方は他の景物の変化同様、時間の経過を示している。

19 早蕨の萌え出づる春になりぬれば野辺の霞もたなびき

にけり (44)

20 み冬つぎ春し来ぬれば青柳の葛城山に霞たなびく (11)

21 おほかたに春の来ぬれば春霞四方の山辺に立ち満ちに

けり (10)

22 おしなべて春は来にけり筑波嶺の木の下ごとに霞たな

びく (12)

この4首にも言葉の連鎖を認め得る。冒頭の春の始まりから時間が進み、霞は山の上から野辺にも木々のもとにも限なく立ち込め、広がり、あたりはすっかり春になるのである。さらに春も終わりになると霞はすっかり姿を消してしまふ。

114 いづかたに行き隠るらむ春霞立ち出でて山の端にも見

えなで (127)

このような時間の認識は貞享本にはない。言葉の連鎖と時間序列の正確さは、定家所伝本の特徴であり、実朝自撰の証左ともなり得る。

### 《冒頭にみる先行作品の影響》

冒頭歌を、語・語句・発想の上で影響していると推測され

る先行歌と比較してみよう。

1 今朝見れば山も霞みてひさかたの天の原より春は来に

けり (1)

春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見

ゆらん (拾遺・春1・壬生忠岑)

今朝見れば霞の衣おりかけて賤機山に春は来にけり

(続古今・春歌上3・藤原兼実)

み吉野は山も霞みて白雪の降りにし里に春は来にけり

(新古今・春歌上1・藤原良経)

2 九重の雲居に春ぞ立ちぬらし大内山に霞たなびく

(2)

ほのぼのと春こそ空にけらし天の香具山霞たなびく

(新古今・春歌上2／後鳥羽院御集・

元久二年三月日吉三十首御会1320)

ひさかたの雲居に春の立ちぬれば空にぞ霞む天の香具山

(続後撰・春歌上6・藤原良経)

3 朝霞立てるを見ればみづのえの吉野の宮に春は来にけり

(7)

春霞立てるを見ればあらたまの年は山より越ゆるなり

けり (拾遺・春2・紀文幹)

「霞」「霞む」「山」の語を含む立春を先行歌に広く学んでい

ることが看取されよう。

まず、壬生忠岑「春立つと…」は、『近代秀歌』の秀歌例

(国歌大観番号28) に載る一首である。この歌は1番歌に表

現が重なるだけではない。「立春」「吉野」「山」「霞む」「今朝

」という定家所伝本冒頭3首のキーワードが凝縮されている。

この忠岑詠と、3番歌に表現の重なる紀文幹詠は、次に引用

する『拾遺集』春の冒頭部を構成する。

1 春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見

ゆらん (壬生忠岑)

2 春霞立てるを見ればあらたまの年は山より越ゆるなり

けり (紀文幹)

3 昨日こそ年は暮れしか春霞春日の山にはや立ちにけり

(山部赤人)

4 吉野山峰の白雪いつ消えて今朝は霞の立ちかはるらん

(源重之)

『拾遺集』冒頭の4首は、「山」(吉野山・春日山・特定しな

い山)と「霞」に表象される春の到来であるという点で、定

家所伝本に類似性を見出せるのである。春冒頭の表現と配列

が『拾遺集』に触発されていることは疑い得ない。

### 《後鳥羽院敬慕》

一方、相違もある。定家所伝本冒頭部3首の配列の特徴は、

連想による場面の移動である。既に触れた実朝の基本的な詠

歌姿勢、都人たる自己把握に鑑みるなら、1番歌は、鎌倉で

はなく、京にいる詠歌者が想定されるとみるべきであろう。まず、1「今朝見れば…」では洛中から眺める山と霞に春の到来を知り、2「九重の…」では山から大内山を連想して宮中の春に思いを馳せ、3「朝霞…」では、さらに旧都の春を想像する。「山」と「霞」を詠みながらこのように空間は移動しているのである。

定家所伝本冒頭歌3首のうち、宮中へ思いを馳せる2番歌「九重の雲居に春ぞ立ちぬらし大内山に霞たなびく」は、後鳥羽院詠「ほのぼのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞たなびく」の構造に学び、第五句をそのまま借り、良経歌なども参考にしつつ「九重」「雲居」「大内山」の語を用いて、宮中の春の詠に仕立てたのである。恰も、大君の詠歌に共感して、御座所の雲居の春をこんな風に詠みました、いかがでしょうか、と言わんばかりの作ではあるまいか。

この2番歌ついて樋口芳麻呂は、「後鳥羽院に対する敬意を詠んだ六六三と見事に照応<sup>⑤</sup>」する、と指摘している。後鳥羽院詠の「春こそ空に来にけらし」は、2番歌のみならず1番歌「天の原より春は来にけり」にも通じる。さらに、3番歌の旧都への思いを併せ考えると、冒頭3首には、後鳥羽院と宮廷への尊重と敬意の表明をみることが出来よう。従って、2番歌と663番歌のみにとどまらず、冒頭歌3首は、最終歌3首に照応する。

661 大君の勅をかしこみちちわくに心は別くとも人に言は  
めやも (679)

662 東の国に我が居れば朝日射す蕤姑射やの山の影(かげ)  
となりにき (681)

663 山は裂け海は浅せなむ世なりとも君にふた心我があら  
めやも (680・新勅撰1204)

定家所伝本『金槐和歌集』は、後鳥羽院敬慕に始まり、廷臣としての絶唱をもって閉じられると言ってよい。

### 3、後鳥羽院詠撰取の様相

冒頭から終結に至るまでの詠歌過程に、後鳥羽院詠の反映をみていく。

影響の質と濃度を的確に掴むのはなかなか困難な作業である。2首の歌を比較する場合、よく使われる語や言い回しが、偶然の一致なのか、意図的な踏襲なのか判断し難いことがある。数首の影響が重なって、一人の歌人へのみ触発されたとはいえぬ場合も多い。

斎藤茂吉はこのような例をも含めて、影響関係が考えられる後鳥羽院歌と実朝歌を列挙しているが、重要なのは、「後鳥羽院と実朝と心の集め方にどこか類似の点を見出すことが出来るのである」「本歌取りする傾向が何となく似てゐるや

うにおもはれるのである」と述べている点である。

以下、類似性・共通性のみられる実朝詠と後鳥羽院詠を比較しつつ検討していくことを試みたい。茂吉も拾っている和歌には\*印を付す。

《影響関係の判断し難い場合》

よく使われる表現であったり、またそうではなくとも後鳥羽院詠の影響が濃いとは言えぬ例を挙げる。

【例1】28 春雨の露もまだ乾ぬ梅が枝に上毛しをれて鶯ぞ鳴

く(16)

秋暮れて露もまだ乾ぬ楢の葉におして時雨のあめ  
そそぐなり (夫木・巻十六 6340 / 後鳥羽院御集・

建仁元年六月千五百番御歌合457)

「露もまだ乾ぬ」の用例には「いつしかと降り添ふ今朝の時雨かな露もまだ乾ぬ秋の名残に(統古今・冬歌542・藤原俊成)」もある。また、「村雨の露もまだ乾ぬ楢の葉に霧たちのぼる秋の夕暮(新古今・秋歌下491・寂蓮)」は、上の句の構造が同じ。先行歌はいずれも秋歌である。実朝は「時雨」「村雨」を「春雨」に換え、鶯を配して春歌に仕立てていよう。

【例2】117 惜しみこし花の袂も脱ぎかへつ人の心ぞ夏にはあ

りける(133)

惜しみこし花や紅葉の名残さへさらにおぼゆる年  
の暮かな (風雅・冬歌893 / 後鳥羽院御集・

建仁元年三月内宮御百首270)

実朝詠の発想は「夏衣花の袂に脱ぎかへて春の形見もたらざりけり(千載・夏歌136・大江匡房)」「折節も移ればかへつ世の中の人の心の花染めの袖(新古今・夏歌179・俊成女)」「いつしかと今日脱ぐ袖よ花の色のうちれば変る心なりけり(拾遺愚草216・藤原定家)」に重なり、後鳥羽院詠の歌意との

関連は薄い。「惜しみこし」は実朝同時代より使われる新しい表現。『後鳥羽院御集』にはもう2例「惜しみこし」の例<sup>1645</sup>いつまでか跡をも雪に惜しみこし春にまかする柴の庵かな(建仁元年十一月积阿九十賀御会)」「惜しみこし同じ名残

のゆかりとて花の道より春や行くらむ(後鳥羽院御集・建保四年二月御百首520)」があるが、建保四年は定家所伝本成立後である。むしろ小侍従「惜しみこし花の袂はそれながら憂き身を替ふる今日とならばや(太皇太后小侍従集28)」に近く、さらに実朝詠は屈託がないと言えようか。

【例3】159 住む人もなき宿なれど萩の葉の露を尋ねて秋は来

にけり(186)

野原より露のゆかりを尋ね来て我が衣手に秋風ぞ  
吹く (新古今・秋歌下471 / 後鳥羽院御集・

元久元年十二月賀茂上社三十首御会1243)

「しきたへの枕の上を過ぎぬなり露を尋ぬる秋の初風(新古今・秋歌上295・源具親)」により強く触発された可能性が

考えられる。

【例4】 208 浅茅原露しげき庭の蟋蟀秋深き夜の月に鳴くなり  
(252)

秋更けぬ鳴けや霜夜の蟋蟀やや影寒し蓬生の月

(新古今・秋歌下517/後鳥羽院御集・

建仁三年九月五十首御会1183)

蟋蟀と月の取り合わせ、深まる秋の夜という共通項はあるのだが、院の詠に深く影響されているという決定的な根拠とはなり得ないであろう。

【例5】 219 鳴きわたる雁の羽風に雲消えて夜深き空に澄める

月影 (227)

雲居飛ぶ雁の羽風に月さえて鳥羽田の里に衣打つ

なり

(後鳥羽院御集・承元元年十一月

最勝四天王院御障子1433)

上の句は院の詠に構造が似るが、詠まれる光景は「村雲や雁の羽風に晴れぬらむ声聞く空に澄める月影」(新古今・秋歌下504・朝恵法師)にはるかに近い。

【例6】 309 小夜更けて雲間の月の影見れば袖に知られぬ霜ぞ

置きける (342)

いつしかと萩の上葉もおとづれて袖に知らるる秋

の初風 (統拾遺・秋歌上219/夫木・秋歌上782/

後鳥羽院御集・正治二年八月御百首36)

「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪を降りける(古今・春64・紀貫之)」に下の句の構造は学んだであろう。「袖に知られぬ」の用例には「窓の雪池の水も消えずして袖に知られぬ春の初風(秋篠月清集401・藤原良経)」「吉野山花は匂ひにこぼれ落ちて袖に知られぬ峰の春風(壬二集2125・藤原家隆)」がみられるが、同時代詠の「袖」に感知されるのは「風」である。実朝は「霜」に換えて冬の夜の光景に転じている。

「草結ぶ小野の篠原月冴えてまだしき霜の袖に知らるる(夫木・雑部十八16881・如願法師)」の影響もあろうか。

【例7】 344 白雪のふるの山なる杉叢の過ぐるほどなき年の暮

かな (401)

我が身世にふるの山辺の山桜うつりにけりなが

めせしまに

(風雅・春歌下237/後鳥羽院御集・

元久元年十二月住吉三十首御会1294)

「ふるの山なる杉叢の」が序詞的に使われる例は万葉歌「石上ふるの山なる杉叢の思ひ過ぐべき君にあらなくに(万葉・卷三425 422・丹生王)」にみられる。後鳥羽院詠は、小町歌「花の色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」の本歌取り。影響は薄いように思われる。

《語・語句の踏襲》

一方、歌意は重ならなくとも、後鳥羽院詠に使用される語・語句の頻度が当時の状況の中で低い場合には、実朝が踏

襲した可能性は高い。

【例1】 71はかなくて暮れぬと思をおのづから有明の月に秋

ぞ残れる (303)

冬の来て紅葉吹き降ろす三室山嵐の末に秋ぞ残れる

(統拾遺・冬歌 378 / 後鳥羽院御集・

建仁元年三月外宮御百首 357)

365 岩にむす苔の緑の深き色を幾千代までと誰か染め

けむ (668)

岩にむす苔踏みならすみ熊野の山のかひある行く

末もがな

403 奥山の苔踏みならす小牡鹿も深き心のほどは知ら

なむ (419)

岩にむす苔踏みならすみ熊野の山のかひある行く

末もがな

71 「秋ぞ残れる」 365 「岩にむす苔」 403 「苔踏みならす」は

実朝同時代までには後鳥羽院詠以外に見当たらぬ表現であ

る。影響関係は疑い得ない。

【例2】 \* 8 松の葉の白きを見れば春日山木の芽も春の雪ぞ降

りける (19)

\* 310 小夜更けて稲荷の宮の杉の葉に白くも霜の置きに

けるかな (629)

311 冬籠りそれとも見えず山林の山杉の葉白く雪の振

れば (380)

春の来てなほ降る雪は消えもあへず杉の葉白き曙

の空 (後鳥羽院御集・建仁元年三月外宮御百首 303)

鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山

(新古今・春歌上 18 / 後鳥羽院御集・

建仁二年二月十日影供御歌合 157)

雪や霜のために白く染まる針葉樹3首。8番歌は構造の似

る「霞立ち木の芽も春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける

(古今・春上 9・紀貫之)」の影響が大きいに相違なく、また、

「松の葉白き」の用例は「吉野山今年も雪の故郷に松の葉白

き春の曙(新後拾遺・春歌上 8・藤原良経)」に見える。310

311は「杉の葉」。「杉の葉白き」は勅撰集・私撰集・私家集を

通じ後鳥羽院歌以外に用例がない。詠まれる光景は多少異な

るものの、杉に積もる雪に着目した院の美意識への共感があ

ろう。

【例3】 42 浅茅原ゆくゑも知らぬ野辺に出て故郷人は董摘み

けり (108)

浅茅生の月吹く風に秋たけて故郷人は衣打つなり

(後鳥羽院御集・建仁元年八月十五夜撰歌合 1553)

216 塩釜の浦吹く風に秋たけて 籬の島に月傾きぬ

(282)

浅茅生の月吹く風に秋たけて故郷人は衣打つなり

(後鳥羽院御集・建仁元年八月十五夜撰歌合1553)

同じ和歌の別の語・語句を撰取した例。後述する245番歌には、さらに内容的な撰取がみられる。

【例4】\*130夕闇のたづたづしきに時鳥声うら悲し道や惑へる

(144)

たそがれのたづたづしさに藤の花折り迷ふ袖に春

雨の空 (後鳥羽院御集・建仁元年三月十八日)

影供御歌合1526)

「たづたづし」には万葉の用例「夕闇は道たづたづし月待

ちていませ我が背子その間にも見む(万葉・巻四712・大宅女)があるが、勅撰集には見当たらない。詠まれる光景は異なるが、「夕闇」「たそがれ」、「惑へる」「迷ふ」の類似表現に院の詠の撰取がみてとれよう。

【例5】489今日も又ひとり眺めて暮れにけり頼めぬ宿の庭の

白雪(384)

よしやさは頼めぬ宿の庭に生ふるまつと告げこせ

秋の初風 (後鳥羽院御集・建仁元年九月二十九日)

恋十五首撰歌合1597)

都人頼めぬ宿の槓の戸に何のならひの庭の松風

(後鳥羽院御集・建仁元年三月外宮御百首382)

うらみよとなれる夕べの景色かな頼めぬ宿の萩の

上風

(後鳥羽院御集・建仁元年六月)

千五百番歌合483)

院の詠「うらみよと…」は『続古今集』に載り、勅撰集中「頼めぬ宿」唯一の語例である。後鳥羽院が好んで用いた「頼めぬ宿」を実朝も踏襲したのであろう。

【例6】499涙こそ行方も知らね三輪の崎佐野の渡りの雨の夕

暮(473)

思ふことそなたの雲となけれども生駒の山の雨の

夕暮

(後鳥羽院御集・建仁元年九月二十九日)

恋十五首撰歌合1608)

「雨の夕暮」の語例は勅撰集中に1例「うちしめりあやめぞ薫る時鳥鳴くや五月の雨の夕暮(新古今・夏歌220・藤原良経)」にみるのみ。後鳥羽院の用いた新しい表現と「駒とめて袖うち払ふ影もなし佐野の渡りの雪の夕暮(新古今・冬歌671・藤原定家)」を応用して恋の歌に仕立てたのであろう。

《語句と詠歌内容の踏襲》

表現のみならず、詠まれる季節、光景、状況も類似する例をみよう。

【例1】50風騒ぐ彼方の外山に空晴れて桜に曇る春の夜の月

(97)

あたら夜の真屋のあまりに眺むれば桜に曇る有明

の月 (続後撰・春歌中104／三百六十番歌合111)

後鳥羽院御集・建仁元年二月老若五十首御歌合1106)

「桜に曇る」という表現は、実朝以前に例がなく同時代には後鳥羽院詠の他は「み吉野の花の白雪猶分けて桜に曇る春の山人（夫木・春部四1185・最勝四天王院和歌14・俊成女）」「薄水清き鏡と見しものを桜に曇る花の下水（自讃歌・異本歌172・源通光）」をみるに過ぎない。新しい表現である。桜に曇る対象が月であると表現したのは後鳥羽院のみ。実朝は「有明の」を「春の夜の」として踏襲したのであろう。

【例2】51木の下の花の下臥夜頃経て我が衣手に月ぞ馴れぬ  
る(62)

花の影旅寝の嵐夜頃経て月ぞ馴れゆく袖の手枕

（夫木・雑部十四15390／後鳥羽院御集・

建仁元年九月五十首御会1166）

「月ぞ馴れたる」「月ぞ馴れゆく」の用例は先行歌及び実朝同時代には見当たらない。同時代の類似表現には、「秋はまた濡れこし袖のあひにあひて雄鳥の海人ぞ月に馴れける（拾遺愚草1132・藤原定家）」「隈もなき衛士の焚く火の影そひて月に馴れたる秋の宮人（拾遺愚草722・藤原定家）」「難波渦聞くべきものは有明の月に馴れたる葦鶴の声（拾玉集2872・慈円）」にみられ、人や動物が月に馴染んでいくという表現が後代に定着していく。後鳥羽院詠は月が人の袖に馴れる、という発想の面白さが身上である。なお、「夜頃経て」の用例は『後鳥羽院御集』に3例（942 1166 1566）見出せるが、歌語として定

着するのは『新千載集』『風雅集』の時代であり、新しい表現である。実朝はこれらの点に着目し、踏襲したのであろう。

【例3】\*58み吉野の山の山守花をよみながながし日を飽かす  
もあるかな(48)

桜咲く遠山鳥のしだり尾のながながし日も飽かぬ  
色かな

（新古今・春歌下99／近代秀歌30／後鳥羽院御集・

建仁元年十一月同時屏風御歌1632）

「我が心春の山辺にあくがれてながながし日をけふも暮らしつ（新古今・春歌上81・紀貫之）」も視野に入っている。花に暮れるのどかな春の光景に共感した詠である。

【例4】61里は荒れぬ志賀の花園そのかみの昔の春や恋ひし  
かるらむ(64)

里は荒れぬ志賀の桜の木のもとに昔語りの春風ぞ  
吹く

（後鳥羽院御集・元久元年十二月  
賀茂上社三十首御会1232）

「とぞ浪や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな（千載・春歌上66・よみ人しらず）」「里は荒れぬ庭の桜も旧りはてたそがれ時を訪ふ人もなし（拾遺愚草1515・藤原定家）」は、まず念頭にあろう。後鳥羽院詠から学んだのは単に語法だけではなく。院の歌の「昔語り」を受けて「恋ひしからむ」と唱和しているようにとれまいか。

【例5】\*141時鳥聞けども飽かず橘の花散る里の五月雨の頃

(159)

時鳥心して鳴け橘の花散る里の五月雨の空

(後鳥羽院御集・建仁元年六月千五百番歌合423)

万葉歌「五月山卯の花月夜時鳥聞けども飽かずまた鳴かむかも(万葉・卷十1956・作者未詳)」「橘の花散る里の時鳥片恋しつつ鳴く日しぞ多き(万葉・卷八1477・大伴旅人)」は当然視野に入っていないよう。後鳥羽院詠の「心して鳴け」は、「聞けども飽かず」に響き合う。

【例6】151夏深み思(ひ)もかけぬうたたねの夜の衣に秋風

ぞ吹く(172)

水無月や竹うちそそぐうたたねのさむる枕に秋風

ぞ吹く

(後鳥羽院御集・建仁元年外宮御百首335)

類歌に「夏衣まだ単なるうたたねに心して吹け秋の初風(拾遺・秋137・安法法師)」があるが、歌の構造は後鳥羽院詠に重なる。影響はまぎれもない。

【例7】\*158吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて

秋は来にけり(189)

山の蟬鳴きて秋こそ更けにけれ木木の梢の色まさ

りゆく

(後鳥羽院御集・建仁元年十一月)

同時屏風御歌1638)

「山の蟬」の語例は勅撰集には見当たらないが、私撰集に

「波風に秋を待つらの山の蟬染めぬ梢の露に鳴くなり(夫木・

夏部三3574・俊成女)」「村雨の跡こそ見えね山の蟬鳴けどもい

まだ紅葉せぬ頃(夫木・夏部三3580・藤原良経)」の例がある。

山の蟬に秋を感知する発想は共通する。

【例8】245秋たけて夜深き月の影見れば荒れたる宿に衣打つ

なる(287)

浅茅生の月吹く風に秋たけて故郷人は衣打つなり

(後鳥羽院御集・建仁元年八月十五夜撰歌合1553)

「深草の霧の籬に誰住みて荒れにし里に衣打つらん(統千

載・秋歌下545・藤原雅経)」も影響しているようが、状況と表

現は後鳥羽院詠により近い。

【例9】300片敷きの袖こそ霜に結びけれ待つ夜更けぬる宇治

の橋姫(332)

橋姫の片敷き衣狭筵に待つ夜むなしき宇治の曙

(新古今・冬歌636/後鳥羽院御集・

承元元年十一月最勝四天王院御障子1431)

451狭筵にひとりむなくも経ぬ夜の衣の裾あはず

して(514)

橋姫の片敷き衣狭筵に待つ夜むなしき宇治の曙

(新古今・冬歌636/後鳥羽院御集・

承元元年十一月最勝四天王院御障子1431)

宇治の橋姫を詠み込む恋の歌は多いが、語彙が重なること、

300番歌の下の句の構造が類似する点で、後鳥羽院詠の影響は見逃しがたい。

【例10】\*331故郷はうらさびしともなきものを吉野の奥の(雪)の夕暮(383)

冬籠り春に知られぬ花なれや吉野の奥の雪の夕暮  
(後鳥羽院御集・正治二年十一月八日影供歌合1510)

定家所伝本は第五句が欠字。貞享本によって補う。類似表現に「さびしはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕暮(新古今・秋歌上361・寂蓮)」「厭ひてもなほ厭はしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮(新古今・雑歌中1620・藤原家衡)」「さびしさを何に譬えむ世を捨つる吉野の奥の冬の夕暮(拾玉集365・慈円)」がある。「雪の夕暮」であるとすれば、後鳥羽院詠に表現を借りたのである。

【例11】335笹の葉は深山もそよに霰降り寒き霜夜をひとりかも寝む(349)

宿貸さん人も交野の笹の葉に深山もさやと霰降り  
夜を  
(後鳥羽院御集・承元元年十一月)

最勝四天王院御障子1421

「笹の葉は深山もさやにさやげども我は妹思ふ別れ来ぬれば(万葉・卷二133・柿本人麻呂)」「笹の葉は深山もさやにうちそよぎ水れる霜を吹く嵐かな(新古今・冬歌615・藤原良経)」に語句の類似をみるが、実朝の詠歌内容は「君来ずは

ひとりや寝なむ笹の葉の深山もそよにさやぐ霜夜を(新古今・冬歌616/近代秀歌16、51・藤原清輔)」に近い。さらに霰降る光景が後鳥羽院詠に重なり、恰も歌の内容に唱和しているような趣である。

【例12】\*336雲深き深山の嵐冴え冴えて生駒の岳に霰降るらし(347)

冬深み外山の嵐冴え冴えて裾野の正木霰降るなり  
(後鳥羽院御集・建仁元年二月老若五十首御歌合1137)

\*586磯の松幾久さかなりぬらんいたく木高き風の音かな(694)

引きて植ゑし人の行方は知らねども木高き松の風の音かな  
(後鳥羽院御集・建仁元年三月内宮御百首281)

\*635夕月夜さすや川瀬の水馴れ棹馴れても疎き波の音かな(591)

熊野川下す早瀬の水馴れ棹さすみなれぬ波の通ひ路  
(新古今・神祇歌1908)

654旧りにける朱の玉垣神さびて破れたる御簾に松風ぞ吹く(645)

ちはやぶる朱の玉垣神さびて榊葉ごとになびく夕風  
(後鳥羽院御集正治二年十一月十一日新宮歌合1502)

以上は、語句の撰取だけではなく、嵐と霰の冬山の寒さ

(336)、丈の高い老松に吹く独特の風の音(586)、水馴れ棹に因む川の風情(635)、神々しい玉垣に風の吹く光景(654)という詠歌内容も踏襲されていると言えよう。

【例13】 356位山木高くならむ松にのみ八百万代と春風ぞ吹く

(662)

八幡山跡垂れ初めし標の内に猶万代と松風ぞ吹く

(新統古今・神祇歌2092・後鳥羽院御集・

建仁元年十二月二十八日石清水社歌合1564)

下の句の構造は同じ。「八百万代」は「猶万代」に響きが通じ、「松風」が「春風」に変わる。源氏の氏神を称える後鳥羽院詠に込えているような一首。

【例14】 366ちはやぶる伊豆のお山の玉椿八百万代も色は変ら

じ(644)

我が頼む神路の山の松の風幾代の春も色は変らじ

(新統古今・賀歌745/後鳥羽院御集・

承元元年正月二十二日御会1689)

「ちはやぶる賀茂の社の姫小松万代経とも色は変らじ(古今・東歌1100・藤原敏行)」「とやかへる鷹のお山の玉椿霜をば経とも色は変らじ(新古今・賀歌350・大江匡房)」など、歌の構造の似る先行歌は見出せるので、とりわけ院の影響が強いとは言い難いが、実朝は伊豆という地方性を敢えて出して唱和している趣である。

【例15】 \*385時雨降る大荒木野の小笹原濡れは漬つとも色に出

でめや(502)

我が恋は真木の下葉に漏る時雨濡るとも袖の色に

出でめや

(新古今・恋歌一1029/後鳥羽院御集・元久元年十月当座歌合1663)

「濡れは漬つとも」の用例は、「雨降らば着むと思へる笠の山人にな着せそ濡れは漬つとも(万葉・卷三377・石上乙麻呂)」の他は、勅撰集にも私家集にも見当たらない。「色に出でめや」は「〜とも色に出でめや」の語法で「笹の葉に置く初霜の夜を寒みしみはつとも色に出でめや(古今・恋歌三663・凡河内躬恒)」「秋萩の枝もとををに置く露の今朝消えぬとも色に出でめや(新古今・恋歌一1025・大伴家持)」に見える。「時雨」に濡れる状況の重なる院の恋歌の影響は疑い得ない。

【例16】 433神山の山下水の湧き返り言はでもの思ふ我ぞ悲し

き(463)

あしひきの山下水の湧き返り色には出でじ木隠れ

てのみ

(新統古今・恋歌一1059/後鳥羽院御集・建仁元年六月千五百番御歌合476)

「山下水の湧き返り」の語例は勅撰集では後鳥羽院の用例のみ。定家所伝本成立までの用例は後鳥羽院と実朝のみ。どちらにも秘めた恋。院の詠に触発されたに相違ない。

《詠歌内容の変容》

表現は重なるが、季節・光景・状況、内容が微妙に、あるいは顕著に変容している例をみよう。

【例1】 77 風吹けば花は雪とぞ散りまがふ吉野の山は春やな

からむ (83)

風吹けば花は波とぞ越えまがふ分け来し旅も末の

松山

(後鳥羽院御集・建仁元年三月尽新宮撰歌合1529)

落花を雪に見立てる歌「駒並めていざ見に行かむ故郷は雪

とのみこそ花は散るらめ(古今・春歌下111・よみ人しらず)」

「散りまがふ花のよそめは吉野山風に騒ぐ嶺の白雲(新古今・

春歌下132・藤原頼輔)」が視野にあらう。後鳥羽院独特の語

句「風吹けば花は波とぞ越えまがふ」の「波」を「雪」に、「越

え」を「散り」に換え、似通ったリズムの、異なる歌意に仕

立てられている。

【例2】 91 今年さへ訪はれで暮れぬ桜花春もむなしき名にこ

そありけれ (88)

今年さへ志賀の弥生の花盛り訪はれで暮れぬ春の

故郷 (後鳥羽院御集・建仁元年三月二十三日

当座御会1579)

「訪はれで」の「れ」は助動詞「る」の未然形。受身・可

能のどちらにとるかによって、歌意は違ってくる。後鳥羽院

詠は可能、自身が訪ねることが出来なかった、の意であらう。

実朝詠は受身。後鳥羽院詠の意を受け、花の立場で詠む。大君にお訪ねいただかなかった花はさぞ残念でしょうよ、と唱和しているようにとれる。

【例3】 156 霧立ちて秋こそ空に来にけらし吹上の浜の浦の風

(183)

ほのほのと春こそ空に来にけらし天の香具山霞た

なびく

(新古今・春歌上2/後鳥羽院御集・

元久二年三月日吉三十首御会1320)

冒頭歌2にも反映している後鳥羽院詠の第二句三句を「春

から「秋」に変えて撰取。「山」から「海」へ背景も変えて

いる。霞の春だけではない。秋も霧とともに空にやってくる。

【例4】 197 白露のあだにも置くか葛の葉にたまれば消えぬ風

立たぬまに (218)

234 鳴く鹿の声より袖に置くか露物思(ふ)頃の秋の

夕暮 (245)

ならばすよ秋なればとて置くか露片敷く袖のうち

しめるまで

(後鳥羽院御集・建仁元年八月三影供御歌合1549)

「置くか露」の用例は後鳥羽院詠と実朝詠以外に見当たらな

い。独り寝の袖が涙で湿ることを暗示する後鳥羽院詠の「置

くか露」を借りて、197は「夕されば野面にみがく白露のたまればかてに秋風ぞ吹く（万代・秋歌上934・藤原有家）」の世界に近い秋の光景に、234は鹿の声への共感に転じている。

【例5】213たまさかに見るものにもが伊勢の海の清き渚の秋の夜の月（279）

二見瀉月をもみかけ伊勢の海の清き渚の春の名残に

（後鳥羽院御集・承元元年十一月

最勝四天王院御障子1440）

春から秋へ季節を転じている。

【例6】220九重の雲居をわけてひさかたの月の都に雁ぞ鳴く

なる（226）

ひさかたの天橋立霞みつつ雲居を渡る雁ぞ鳴くなる

（後鳥羽院御集・承元元年十一月

最勝四天王院御障子1430）

語を重ねながら異なるのは、後鳥羽院詠は春近く帰る頃の雁であるのに対し、実朝詠は秋にやって来た雁。

【例7】214伊勢の海や波にたけたる秋の夜の有明の月に松風

ぞ吹く（280）

しをれこし袂乾す間も長月の有明の月に秋風ぞ吹く

（後鳥羽院御集・建仁元年三月二十二日三体和歌1575）

「有明の月」に「風」が吹く光景は後鳥羽院詠以外に見出し難い。実朝によって「秋風」が「松風」に置き換えられた

ことにより、院の歌に漂う恋の情趣は、伊勢の海辺の叙景歌となる。

【例8】259虫の音もほのかになりぬ花薄秋の末葉に霜や置くらむ（306）

長月や秋の末葉に霜置けば野原の小萩枯れまくも

惜し

（後鳥羽院御集・建仁元年二月老若五十首歌合1127）

「秋の末葉」の語例は、259番歌が『続古今集』に載る他は勅撰集には「花薄秋の末葉になりぬればことごとくなく露ぞこぼるる（新古今・雑歌上1572・源行宗）」しか見当たらない。

また、「世の中も厭ふ心も軒に生ふる草の葉深く霜や置く

らむ（拾遺愚草員外・述懐十首490・藤原定家）」のような類

歌はあっても「秋の末葉」に「霜」が置く例はない。霜が置

くと小萩が枯れるのが残念だという院の詠に対し、実朝詠は

虫の音がほのかになったことから末葉の霜を知るといふ趣。

【例9】\*290月影の白きを見れば鵲の渡せる橋に霜ぞ置きにける

（343）

秋の霜白きを見れば鵲の渡せる橋に月の冴えける

（後鳥羽院御集・建仁元年十一月同時屏風御歌1637）

歌の構造の似る両歌。後鳥羽院詠は「鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける（新古今・冬歌620・大伴家持）」の本歌取り。実朝詠ではさらに、霜を詠んだ後鳥羽院

詠の上の句（霜）と下の句（月）が反転する興趣である。

【例10】 304 更けにけり外山の嵐<sup>あ</sup>え<sup>は</sup>てて十市の里に澄める

月影 (346)

冬深み外山の嵐<sup>あ</sup>え<sup>は</sup>てて裾野のまさき霰降るなり

(後鳥羽院御集・建仁元年二月老若五十首御歌合1137)

子 敏 関 今

語句の重なり、構造の類似から「更けにけり山の端近く月<sup>あ</sup>え<sup>は</sup>てて十市の里に衣打つ声（新古今・秋歌下485・式子内親王）」に実朝が学んでいることは疑い得ない。ただし、「外山の嵐<sup>あ</sup>え<sup>は</sup>てて」は後鳥羽院独特の表現。勅撰集・私撰集・私家集のいずれも後鳥羽院の他に用例がない。動的な嵐と霰を組み合せた院の詠から、嵐によって澄み<sup>あ</sup>え<sup>は</sup>たした冬の月の射す十市の里へと転じた実朝の受容は意図的であろう。この後鳥羽院詠は既にみたように、336にも反映されている。

【例11】 305 比良の山山風寒み唐崎や鳩の湖に月ぞ氷れる (340)

唐崎や鳩の湖の水の面に照る月なみを秋風ぞ吹く

(後鳥羽院御集・建仁元年八月十五夜撰歌合1554)

実朝詠は「雲払ふ比良山風に月<sup>あ</sup>え<sup>は</sup>てて氷り重ぬる真野の浦波（続古今・冬歌618・源経信）」「志賀の浦や遠ざかり行く波間より氷りて出づる有明の月（新古今・冬歌639・藤原家隆）」に光景が通じる。後鳥羽院詠との関連は、同じ場所に時が移り、季節が秋から冬に変わったおもしろさであろう。

【例12】 308 難波濁葦の葉白く置く霜の<sup>あ</sup>え<sup>は</sup>たる夜半に鶴ぞ鳴く

くなる (326)

難波江や葦の葉白く明くる夜の霞の沖に雁も鳴く

なり

(後鳥羽院御集・承元元年十一月最勝四天王院御障子1414)

原田正彦が「葦の葉白く」について、「後鳥羽院のこの歌以前には例を見ないものであり、実朝は一首の姿も、雁から鶴に詠みかえた形で、後鳥羽院歌をほとんど踏襲しているといつてよい。」と指摘している通り、新しい表現である。「葦の葉白し」は、勅撰集では、後代に「難波濁入り江の波に風<sup>あ</sup>え<sup>は</sup>てて葦の葉白き夜半の初霜（続後撰・冬歌443・平貞時）」がみえる。春のはじめの院の詠は霞の沖に間もなく帰る雁を配するが、霜で葦の葉が白い実朝詠には鶴が配され白さと寒さが強調される。

【例13】 327 我が庵は吉野の奥の冬籠り雪降りつみて訪ふ人もなし (374)

冬籠り春に知られぬ花なれや吉野の奥の雪の夕暮

(後鳥羽院御集・正治二年十一月八日影供歌合1510)

院の詠は331番歌にも反映されている。実朝詠の歌意は「我が宿は雪降りしきて道もなし踏み分けて訪ふ人しなければ（古今・冬歌322・よみ人しらず）」により近いが、院の詠に語彙が重なることは看過し難い。

【例14】 \*334 見わたせば雲居はるかに雪白し富士の高嶺のあけ

ぼの空 (366)

八重霞煙も見えずなりぬなり富士の高嶺の夕暮の空  
 (後鳥羽院御集・元久元年十二月住吉三十首御会 1293)

「天の原富士の煙の春の色の霞に靡くあけぼのの空 (新古今・春歌上 33・慈円)」も目にしていようか。後鳥羽院詠の季節と時間を置き換えた富士と空。

【例15】 386 時雨のみふるの神杉ふりぬれどいかにせよとか色のつれなき (558)

深緑争ひかねていかならむ間なく時雨のふるの神杉

(新古今・冬歌 581 / 後鳥羽院御集・

元久二年三月日吉三十首御会 1338)

歌意の近い「いその神ふるの神杉ふりぬれど色には出でず露も時雨も (新古今・恋歌 1028・藤原良経)」「思ふよりいかにせよとか秋風に靡く浅茅の色異なる (古今・恋歌 475・よみ人しらず)」「唐錦惜しき我が名はたちはていかにせよとか今はつれなき (後撰・恋 2685・よみ人しらず)」の影響は当然あろう。実朝詠は、院の冬歌を恋歌に転じる。「間なく時雨のふるの神杉」に想を得た「時雨のみふるの神杉」であらう。

【例16】 399 時鳥待つ夜ながらの五月雨にしげきあやめのねに

ぞ泣きぬる (530)

時鳥待つ夜ながらのうたたねに夢ともわかぬ明け

方の声

(後鳥羽院御集・元久元年十二月 賀茂上社三十首御会 1236)

類歌に「有明のつれなく見えし月は出でぬ山時鳥待つ夜ながらに (新古今・夏歌 209・藤原良経)」がある。院の詠は夏歌。実朝詠は時鳥を待つことが恋人を待つ辛さに重なる。

【例17】 409 秋の野の花の千種にものぞ思ふ露よりしげき色は見えねど (423)

亡き人の形見の雲やしをるらむ夕の雨に色は見えねど (新古今・哀傷歌 803 / 後鳥羽院御集・

建永元年七月二十五日御歌合 1683)

「色は見えねど」の用例は、勅撰集では後鳥羽院詠の他、後代の「置く露に色は見えねど菊の花濃紫にもなりにけるかな (玉葉・冬歌 896・町尻子)」のみ。私家集では「五月闇色は見えねど橘の香こそはまづは人に知らるれ (大式三位集 54)」をみるのみ。詠歌内容は全く異なるのだが、後鳥羽院詠に語句を借りている可能性は高い。

【例18】 \*536 塩釜の浦の松風霞むなり八十島かけて春や立つらむ (8)

海の原遠の霞の春の色に八十島かけて帰る雁がね

(後鳥羽院御集 1102・建仁元年二月老若五十首歌合 1110)

実朝は「見渡せば霞のうちも霞みけり煙たなびく塩釜の浦 (新古今・雑歌中 1611・藤原家隆)」「塩釜の浦吹く風に霧晴

れて八十島かけて澄める月影（千載・秋歌上285・藤原清輔）にも学んでいよう。

【例19】541住吉の松の木隠れゆく月のおぼろに霞む春の夜の空

(101)

三輪の山杉の木隠れゆく月にすずしく名乗る時鳥  
かな  
（後鳥羽院御集・承元二年十一月  
最勝四天王院御障子141）

実朝詠は、「浅緑花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月（新古今・春歌上56・菅原孝標女）」に通じる光景。院の詠の三輪の杉に木隠れる月と時鳥、という夏の詠が、住吉の松に木隠れる朧月夜へ転じる。

子 敏 関 今

以上、後鳥羽院詠は多様に反映されているのである。院は進取の気象に溢れた帝王であった。古歌にはない詞を積極的に歌に織り込み、時代に先駆けて新しい表現を縦横に取り入れ、新しい視点を開拓した。実朝はその姿勢に魅了され、共感してなぞらえ、また趣向を変え、恰も唱和するように響き合う歌を詠んだ。実朝は「詞」も「心」も院に学んだと言えるだろう。

#### 4、後鳥羽院詠の実朝歌反映の可能性

最後に、後鳥羽院詠に実朝歌が反映されている可能性に触れておきたい。後鳥羽院詠を実朝詠に並べて比較する。

333 山高み明け離れゆく横雲の絶え間に見ゆる峰の白雪

(365)

朝日出でて空より晴るる川霧の絶え間に見ゆる遠の山本

（続後撰・秋歌中317／後鳥羽院御集・

建保四年二月御百首591）

実朝歌は『新勅撰集』（423）所収歌。院の歌の詠まれた建保四年には定家所伝本は既に成立している。実朝詠の歌意は「鐘の音に今や明けぬと眺むれば猶雲深し峰の白雪（壬二集2619・藤原家隆）」に近いのだが、「絶え間に見ゆる」は実朝同時代以降に定着する新しい表現である。詠まれている光景は異なるものの、後鳥羽院が実朝詠を撰取してはいないだろうか。

とりわけ注目されるのは、承久の乱後、隠岐に流された院が流謫の地で詠んだと考え得る『詠五百首和歌』に実朝歌に通じるものがみえることである。

【例1】157うちはへて秋は来にけり紀の国や由良の御崎の海

人の浮子繩（184）

浦人の難波の春の朝風に霞を結ぶ網の浮子繩

(後鳥羽院御集・詠五百首和歌667)

実朝の念頭には「咲き初めし時より後はうちはへて世は春なれや色の常なる(古今・雑歌上・紀貫之)」があろうし、歌意は異なるが歌の構造は「うちはへて苦しきものは人目のみしのぶの浦の海人のたく繩(新古今・恋歌二1096・二条院讀岐)」に似る。院の詠は季節が秋から春に変わる。「海人の浮子繩」も「網の浮子繩」も後代に定着する表現。

【例2】 343 武士の八十字治川を行く水の流れて早き年の暮かな(400)

山吹の花の露添ふ玉川の流れて早き春の暮かな

(後鳥羽院御集・詠五百首和歌691)

実朝歌は『新勅撰集』(437)所収歌。「武士の八十字治川」という表現を万葉に借りて詠む。「流れて早き」の用例には「昨日といひ今日と暮らして明日香川流れて早き月日なりけり(古今・冬歌341・春道列樹)」「あせきにもとまる紅葉やかなるらん流れて早き秋の暮には(千五百番歌合1647・宜秋門院丹後)」があるが、後鳥羽院詠の構造は実朝詠に似る。院の詠は、川に象徴される時の流れの早さを「年の暮」から「春の暮」へ転じる。

【例3】 601 嘆き侘び世をそむくべき方知らず吉野の奥も住み憂しといへり(688)

時雨とてここにも月は曇るめり吉野の奥も憂き世

なりけり(後鳥羽院御集・詠五百首和歌855)

両歌とも「み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ(古今・雑歌下950・よみ人しらず)」「いづくにか身を隠さまし厭ひ出でて憂き世に深き山なかりせば(千載・雑歌中1150・円位法師)」を踏まえていよう。後代には「思ひ入る吉野の奥もいかならむ憂き世のほかの山路ならねば(新後撰・雑歌中1373・九条左大臣女)」「いかにせむつらきところの数そへて吉野の奥も住みよからずは(続千載・雑歌下2010・藤原実経)」と詠み継がれる。後鳥羽院には「月は曇るめり」「花は散るなり」の照応から「いづくにて風をも世をも恨みまし吉野の奥も花は散るなり(千載・雑歌中1073・藤原定家)」の影響があろう。実朝歌に触発されている可能性も消し難い。

【例4】 604 世の中は常にもがもな渚漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも(572)

塩釜の浦漕ぐ舟の綱手苦しきものはうき世なり

けり(後鳥羽院御集・詠五百首和歌1010)

実朝歌は『新勅撰集』(525)、『百人一首』93に採る。両歌とも「陸奥はいづくはあれど塩竈の浦漕ぐ舟の綱手かなしも(古今・東歌1088)」に学んでいよう。「綱手」「綱手繩」の用例は「川舟の上りわずらふ綱手繩苦しくてのみ世を渡るかな(新古今・雑歌下1775・藤原頼輔)」「綱手引く千賀の塩釜繰り返しかなしき世をぞうらみはてつる(定家名号七十首49)

「難波渚行き交ふ舟の綱手繩くるとも見えす葦の間もなみ（玉葉・旅歌1223・壬生忠見）」「うけひかぬ海人の小舟の綱手繩絶ゆとてなにか苦しかるべき（続後撰・恋歌一709・京極前関白家肥後）」などがある。院の歌意は川舟を詠む頼輔詠に近いが、海を漕ぐ舟の詠である。実朝詠にも触発されている可能性はあろう。

【例5】 659 神風や朝日の宮の宮遷し影のどかなる世にこそあ  
りけれ (616)

神風や豊榮昇る朝日影曇りはてぬる身を嘆きつつ

(後鳥羽院御集・詠五百首和歌1091)

院の詠は「曇りなく豊榮昇る朝日には君ぞ仕へん万代までに（金葉二・賀333・源俊頼）」を本歌とする。実朝詠は玉葉集・神祇歌に「伊勢遷宮の年よみ侍りける歌」、夫木和歌抄・雑部十六に「家集、神祇歌中」の詞書で載る。実朝には「秋の月影のどかにも見ゆるかなこや長き世のためしなるらん（玉葉・賀歌1067・藤原公任）」が念頭にあったと思われる。語は重なりながら、おおらかに世の平和を詠む実朝歌とは対照的な院の詠である。影響関係の確証はないが、「神風」と「朝日」が入る詠は珍しい。

以上のように院の歌にも実朝の影が仄見える。隠岐に流謫の身の後鳥羽院の胸に、亡き実朝が、その残された歌が、去来することがなかったとは言えまい。

## 5、おわりに

実朝にとって歌を詠むことは、直接には面会叶わぬ後鳥羽院との伝達手段でもあり得た。実朝の敬慕、表現の踏襲を楽しんでいような歌の学び、唱和的な詠みぶりは、定家所伝本を目にすれば、誰よりも後鳥羽院自身に最もよく理解できるはずである。

後鳥羽院の廷臣たる帰属意識の強い実朝であったが、臣下としては、きわめて特殊な立場にあった。賀歌の一首「369 君が代も我が代も尽きじ石川や瀬見の小川の絶えじと思へば」は、「君が代」と「我が代」が並ぶ、東国の覇者・実朝ならではの歌であろう。両者は、人の上に立つ王者という点で共通する。王たる者はすべてを統括する。人民を守護し、統治し、群臣を配下に置く。ひとたびクーデターが起れば、自身が罪人となり、また命を落とすことになる。その責務と孤独は王者にしかわからない。甥・公暁の刃に倒れた実朝と、失意のまま隠岐で生涯を終えた後鳥羽院は、奇しくも悲劇的な運命も重なるのである。

この世で相見ることのなかった覇者たる歌人の間には、精神のあり方と感性に共鳴し合うものがあるように思われる。

(教授 日本文学)

注

- ① 今関敏子『金槐和歌集』の時空―定家所伝本の配列構成―和泉書院2000
- ② 斉藤茂吉「後鳥羽院と実朝と」『源実朝』岩波書店1943 本稿中の斉藤茂吉の言及は同書に拠る。
- ③ 原田正彦「源実朝と後鳥羽院歌壇―金槐集と新古今集成立期の和歌との関連を中心に―」実践研究2・1998・6
- ④ 安保如子「源実朝の『露色随詠集』享受の可能性」国文90・1999・1
- ⑤ 谷山茂著作集第四巻「『新古今時代の歌合と歌壇』第四章（角川書店1983）、樋口芳麻呂『後鳥羽院』（王朝の歌人10・集英社1985）、目崎徳衛『史伝後鳥羽院』（吉川弘文館2001）、吉野朋美「後鳥羽院の実朝懐柔策と和歌―建保三年『院四十五番歌合』について―」（『古代中世文学論考第十二集』新典社2004）
- ⑥ ①の拙著第一章第二節で述べた。一言でいうなら、時空認識が相違する。
- ⑦ 定家所伝本『金槐和歌集』の引用は、佐佐木信綱複製本に拠り、私に表記する。  
また、貞享本『金槐和歌集』及び、本稿中に引用する和歌は、『新編国歌大観』（角川書店）に拠り、比較しやすいよう私に表記する。『後鳥羽院御集』についても同様であるが、寺島恒世「後鳥羽院御集」（和歌文学大系24・明治書院1997）を参照した。
- ⑧ ①の拙著で論じた。
- ⑨ 樋口芳麻呂『金槐和歌集』（新潮日本古典集成）1981頭注。
- ⑩ ③に同じ。
- ⑪ 『詠五百首和歌』は、樋口芳麻呂「後鳥羽院」（『中世の歌人―日本歌人講座3・弘文堂1968）が隠岐で成立したことを指摘して以来、その捉え方、後世への影響については、寺島恒世「後鳥

羽院「詠五百首和歌」考―雑の歌を中心に―」国語と国文学1981・5、小原幹雄「隠岐五百首和歌」について」島大国文18・1989）、伊藤敬「隠岐の後鳥羽院抄」藤女子大学・藤女子短期大学紀要第一部33・1996・2）、寺島恒世「後鳥羽院「詠五百首和歌」の表現―作成のねらいとの関わりから―」『王朝和歌と史的展開』笠間書院1997、田淵旬美子「流謫の後鳥羽院―『続後撰集』以降の受容―」（国文95・2001・8）等の論考が出されている。